

三好市の方言

方言班（徳島県方言学会）

仙波 光明^{1*} 峪口有香子²

要旨：この稿では、阿波学会の過去の報告（主として山城町を対象とした紀要第24号）と比較することに加えて、未調査であった池田町箸蔵の情報、及び阿波学会調査以外の機会に得られた情報を加え、文法と語彙を中心に報告する。文法の面では、日本語史の関心事であったナ行変格活用（五段化、下一段活用）の五段化の変化が終了したと見られること、上郡に特徴的であったミジョ・ミジョーが衰退しているかもしれないこと等を確認した。また語彙面ではツボツボムシ（蟻地獄）、ノキスズメ（雀）等は健在が確認できたが、シロイ（彼岸花）、ワラビナ（蕨）等は確認できなかった。他に、トソソコ、ヘリヤイ等の語彙について三好市の方々から情報を受けた、これまで徳島県の方言資料に未見の語も取り上げた。

キーワード：上郡、山分北、山城町大野、池田町箸蔵、吉野川流域言語調査

1. はじめに

今回の調査は、(1) 調査票を用いた、文法・表現法・語彙・アクセントに関する面接調査、(2) 自然談話の収録調査、の2種類の方法を採用した。方言談話は、実際に使用される方言を観察できるという点で有効である。調査は2017年8月に大野和老会（山城町）、2018年6月に池田町箸蔵公民館に赴きアクセント、談話聞き取りの他、調査票による調査を実施した。

また、語彙項目については、文献資料を利用してできるだけ歴史を溯り、また地理的な分布を参照することで、三好市の方言の日本語の中での位置づけを明らかにすることに努めた。

2. 方言区画上からみた三好市方言の位置づけ

徳島県は四国の東部に位置し、近畿方言との共通性も強くうかがえる地域である。森（1982）によると、三好市は、「上郡」（三野町、池田町、井川町）、

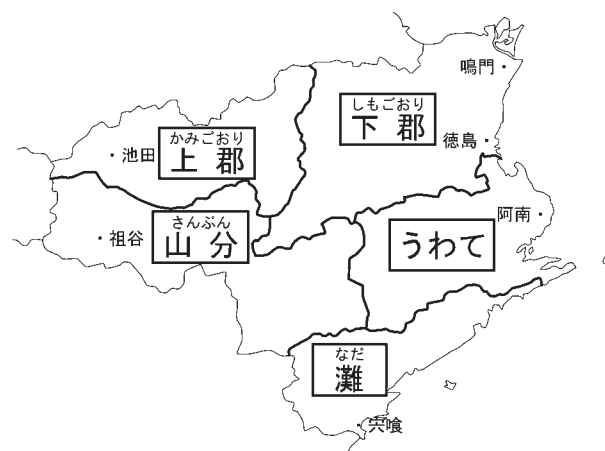


図1 徳島県における方言区画 上野（1997）

「山分」（山城町、西祖谷山村、東祖谷）という方言区画上異なる2つの地域を含んでいる。

3. 音声・音韻の特徴

1) アクセント概略

今回の調査結果は未整理のため、ここでは過去の調査に基づいて概要を述べるにとどめる。

1 徳島大学名誉教授 2 四国大学地域教育・連携センター

* 〒771-1202 徳島県板野郡藍住町奥野字和田109-14

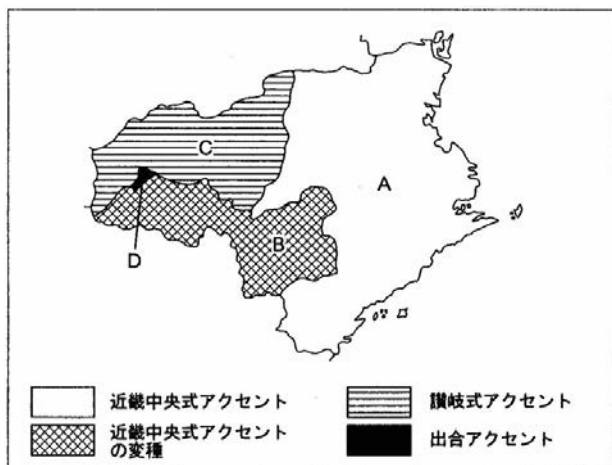


図2 徳島県のアクセント体系 上野 (1997)

三好市に行われるアクセントはおおまかに見ると京阪式の変種である讃岐式であるが、細かく見ると上郡に分布する池田式と山分北に分布する一字・山城谷式、そしてこの境界の出合地区にある出合式の3種を認めることができる。

その3種の違いがもっとも良く分かる2拍名詞第1類(庭鳥類)を例に述べると、「ニワガ」が池田式では「高高高(●●▲)」に、一字・山城谷式では「低高低(○●△)」に、出合式は「高低低(●○△)」になるという違いがある。

池田式では、第1類と第3類(山犬類)が●●▲に、第2類(石川類)が●○△、第4類(松笠類)が○○▲、第5類(春雨類)が○●△になる。

一字・山城谷式では、●●▲になる類が無く、○●▲も無い。そして、第1類・3類・5類が○●△になる。第2・4類は池田式と同じで、それぞれ●○△、○○▲になる。

出合式は、第1・2・3類が頭高の●○△、第4類は○○▲、第5類は○●△になる。

2拍名詞第1類のアクセントの場合、1989年大野小学校・河内小学校6年生13名を対象とした調査(上野他(1991))では、189回の発音のうち東京式の○●▲が50.8%、一字・山城谷式の○●△が45.5%であった。回答者が言語形成期後半にある小学生なので、まだアクセントが安定していないということも考えられるが、一方、変化の結果が東京式に似ているので、テレビ(と学校教育)の影響を排除できないかもしれない。この変化が定着するかどうかを追跡することが今後の課題となるであろう。

2) セの発音

「背中」「汗」を読んでもらうほか、談話の間に出てくる「セ」が口蓋化して「シェ」になるかどうかを観察した。国立国語研究所(1967)では、上郡5地点すべて「シェ」と報告されているが、今回「シェ」を聞くことはなかった。

3) ガ行鼻濁音

国立国語研究所(1967)では「鏡」の「が」が鼻濁音で発音されるとの報告になっている。今回の調査では、一部鼻濁音が現れるものの多くの場合、濁音の「g」であった。

4) ダ行の入り渡り鼻音について

これまでに阿波学会で調査した山分地域では、話し手自身はほとんど気づかないようであったとはいえ、ダ行音の直前に軽く鼻にかかる音が現れる傾向があった。それが極端に現れた例を挙げると、かつて交通情報を担当していたある男性は「国道」を「コクンドー」と発音していた。今回の自然談話の中には、この現象を認めることはできなかった。

4. 文法項目

この項では主として2017年8月、山城町大野で行った聞き取り調査に基づいて報告する。

なお、この項と次項においては、川島他(1978)の調査との対比に言及することになるので、この報告での調査地点について簡単に触れておく。川島他(1978)では、11地点で調査を行っているが、それは、北から、池田(上郡里分・現池田町)、馬路・漆川・出合(上郡中分・現池田町)、川口、大野、河内、西宇、上名、下名(山分北・現山城町)、櫟生(山分北・現西祖谷山村)の各地点である。

1) 禁止表現

「行くな」「行ってはならない」ということをどう言うか。

イクナヨー(男) イカレンデー(女)

「行きなはんな」とは言わない。

2) 命令表現

「早く行け」ということをどう言うか。

ハヨ イカンカエ(女)

「行きな^{しも}い、行きー、行きで」等は「下の言い方」だと言う。山城町よりは東、吉野川下流にあたる地

域の言い方だと認識されているようである。川島他(1978)は池田・馬路・漆川の3地点で「～なはれ」を挙げるものの、出合から南については結果を示していない。「行きて」の様な言い方は三加茂(現東みよし町)で採集できている(仙波他(2013))。

3) 打ち消し過去

「行かなかった」ということをどう言うか。

女性からは「行かなんだ」、男性からは「行かざった」も時々使うという回答が得られた。

金沢(1961)には、「～ざった」のような表現について「これはもう山分の古老の間だけに残る形」と述べられており、川島他(1978)では、池田・馬路で「行かなんだ」、漆川・出合で「行かなんだ、行かざった」両用、川口から南の山分北に属する地域で「行かざった」を使うと報告されている。

さらに、山西(1989)に「行かざった、何々せざった(しなかった)否定の意味につかう」とあり、仙波他(2002)では山城町の2地点で確認されているものの、今回の調査からは、これがもう、少なくとも山城町大野近辺では消滅しつつあり、その変化は女性において先行していることをうかがわせる結果となった。

4) 丁寧な依頼

「取ってくれ」を丁寧に(目上に)言う場合、どう言うか。

「取ってつかはれ」は、昔は使ったが今はもう言わないとのことであった。川島他(1978)でも「つかはれ」は池田町に属する地域の用語であって、山城町・西祖谷山では、「つかされ」が()に包まれて示されており、この言い方が日常的ではなかったことをうかがわせる。また「取ってつか」も池田の言い方であって山城では使わないと回答があった。今使うのは、「取ってや」あるいは「取ってくれんかえ」であり、そもそも家族は別として目上にはこのような頼み事はしないと言う。

5) 勧誘表現

「そろそろ帰ろう」の「帰ろう」の部分はどう言うか。

例として「帰らんで」「帰ろうで」「帰ろうえ」を示したが、大野ではいずれに対しても否定的であった。代わりに示されたのが「いのうで」であったの

で、「帰る」より「去ぬ」を選ぶという語彙的な問題があった。しかし、「～で」の形が勧誘表現として使われることは確認できた。

一方で、「いなんかえ」「いぬかえ」という本来は問いかけの形が誘う時の言い方として、ここに出てきたことには注意しておく必要がある。

なお、川島他(1978)では、「起きる」を用いて勧誘あるいは意思を表す場合にどう言うかが調査されており、「オキョー」が池田町で、「オキュー」が山城町で確認されているが、今回の調査ではどれも否定的な回答になった。

6) ナ行変格活用「去ぬ・死ぬ」

「去ぬる」とか「死ぬる」という言い方をするか聞いてみた。川島他(1987)では、出合以南で使われ、池田町では使うこともあったことがわかるが、今回の調査では、もう確認できなかった。「去ぬる・死ぬる」は消滅し「去ぬ・死ぬ」になっているのであろう。

7) 下一段活用の「蹴る」

「蹴らない」と言う代わりに「蹴ん」と言うか、「蹴らなんだ」ではなく「蹴なんだ」と言うか。

川島他(1978)では、漆川から南の地域、すなわち上郡中分と山分北で使用されていたことが分かり、仙波他(2002)では、池田町州津と三好町の2地点で採集されているが、今回は確認できなかった。

ナ行変格活用の消滅とあわせて、日本語文法の変化が完了した証拠と言ってもよからう。

8) 可能表現(ミジョ・ミジョー)

本来、語彙の項目で取り上げるべきかもしれないが、可能の副詞「ミジョー」を使うかどうかについて便宜上ここで取り上げる。

ミジョーは櫛生以外の地域すべてで使うと回答されている。県内方言集ではそのほとんどが上郡地域のものであるが、上郡以外では阿波町史編集委員会(1965)「みじょう(じぶんでに)それびゃいのことみじょうするわ」、上分上山村誌編集委員会(1978)「ミジョスル 自分でする」に出ている。また、仙波他(2002)では佐那河内村府能が使用の東端になっている。

今回の調査では大野で使うという回答が得られたが、箸蔵では、今は使わないということであった。

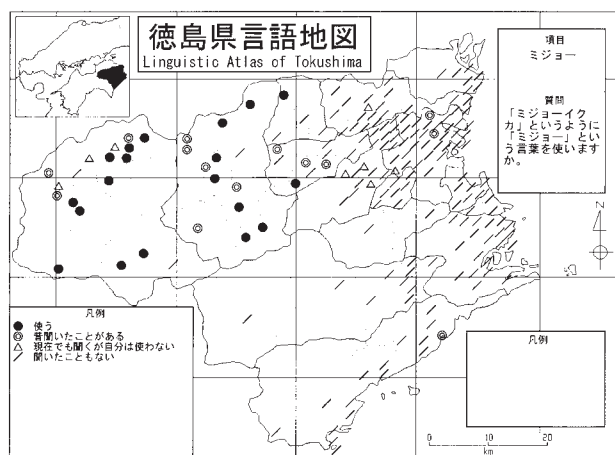


図3 「ミジョー」 仙波他 (2002)

5. 語彙 I

語彙 I では、川島他 (1978) に示された語が今でも使われているか、あるいは知られているかを確かめた結果を報告し、あわせてそれらがどの地域に分布するかを述べる。したがって、見出し語はすべて川島他 (1978) での調査項目であり、そこでの状況を説明の始めに示す。

1) ツボツボムシ (蟻地獄)

馬路以外の地域でツボツボムシであり、馬路ではベコサン・ツボクリムシが見える。ベコサンは県内の他の資料に見あたらないが、ベコ系の言い方は長野県、富山県、福島県等に分布している。ツボクリムシは東祖谷にもあるが他に同語形は見つからない。なお、ツボクリは奈良県吉野地方に、ツボムシが大分県や宮崎県に分布する。県内方言集には、山西 (1989) に「つぼつぼむし (ありじごく)」, 井上 (1937) に「ツボ／＼ムシ 蟻地獄」と出ている。ツボツボムシは今回の調査でも確認できた。

2) イタクラ (燕)

これは、出合、川口、大野、河内、西宇で採集されている。なお、県内方言集を見ると、イタクラは、森本 (1950)、金沢 (1976)、俵 (1990)、海南町 (1995)、井上 (1937)、木沢村 (1976) に出ているが、すべて「雀」とされている。金沢他 (2001) でも同様である。尚学図書 (1989) でも「雀」である。

3) ノキスズメ (雀)

池田から西宇までの8地点でノキスズメ、西宇以南の4地点でイタクラとなっている。

今回の調査では、ノキスズメを確認でき、またノキツチョとも言うことが分かった。

県内方言集では、俵 (1990) に、イタクラに対する説明として「軒雀」が見つかっただけで、ノキスズメを見出し語とするものは未見である。また、尚学図書 (1989) には、愛媛県宇摩郡の資料にノキスズメがあることが見えるだけで、他の例はないようである。「軒端に来る雀」を特にノキスズメと区別するのでなく、雀一般をさす語としてノキスズメを使うのは珍しいのではないだろうか。

4) ヒューリ (蚕蛾)

池田・馬路・川口・大野でヒューリ、漆川でヒール、出合でオヒューラハン。

金沢 (1976) には、ヒューリが県下全域で使われていることが示されているが、この語を収録する方言資料は、川島他 (1992) だけである。また、蚕蛾をヒューリと言うのは徳島県だけのようである。

5) ニシムケ (蚕蛹)

漆川・川口・河内・西宇・上名でニシムケ、池田・馬路ではムツゴ、馬路ではビビとも言う。出合・下名・櫛生ではニシャドチであり、大野ではニシムケヒガシムケとなっている。この蚕の蛹をさすニシムケヒガシムケは県内資料には見つからないようであるが、尚学図書 (1989) によれば香川県と福岡県久留米市にもこの言い方があるらしい。

6) カマキリ

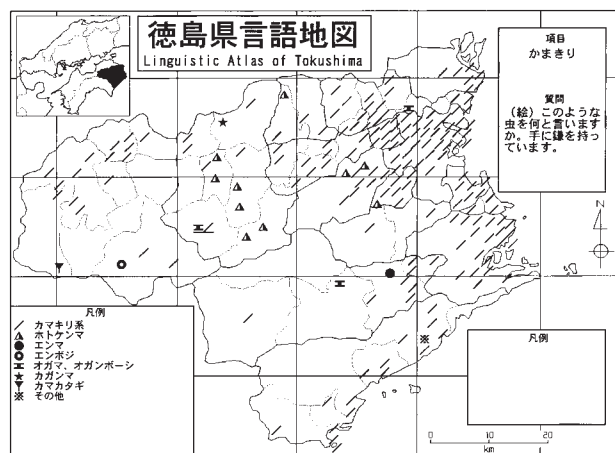


図4 「かまきり」 仙波他 (2002)

池田・漆川でホトケンマ、馬路・出合・下名・櫛生でエンボジリ、上名でヘンボージリ、出合・川口・大野・河内・西宇・上名にはトーロー、大野・

櫟生にオガマニャトーサン、下名はオガマノトーサン等、多彩であった。昭和30年代における徳島県下のカマキリ語彙は森（1962）によって詳しく調査されているが、平山他（1997）に地図が再録され、金沢（1976）には地区ごとに整理された図を見ることができ、数多くの俚言形がかつて存在したことが示されている。それが仙波他（2002）によると、もう県下ほとんどの地域でカマキリ（図4で「／」で示されている）になり貞光・穴吹・木屋平と神山・佐那河内にホトケンマがかるうじてまとまった分布を示すだけになり、あとは山城の高知県境近くの1地点でカマカタギが採集されているなど昔の語形はほとんど失われてしまったように見える。

大野では、かつてトーローとかオガマナトーサンと言っていたらしいが、今回は、これを確認することはできなかった。

7) カマキリの卵

馬路から西字まではエンボジリ、上名・下名・櫟生ではオジフグリ、上名ではさらにオジーノフグリ、下名ではオジャフグリもあった。馬路と出合とでは成虫と卵とを呼び名で区別していなかったらしい。森（1962）では、カマキリに対してと同様に多様な俚言が報告されているが、エンボジリなどは今回確認できなかった。しかし、山西（1989）には「えんぼうじ」が見出し語となっている。また、俵（1990）にはオジフグリがある。

8) アリンド（蟻）

出合から南の地域でアリンド、馬路ではアリコと言った。アリンドは現在でも使われている。また、この語形は関東、中部、四国各地の資料に報告がある。

9) わらび

池田・馬路・漆川でワラビナ、その他の地域からは回答が得られていない。県内資料ではワラベナが井川・半田・貞光・脇町に見られる。県外についてはワラビナが香川県の他、島根県隠岐と長崎県、ワラベナは香川県に記録されている。

今回の調査で得られた回答はワラビであった。

10) 彼岸花（メクサリバナ・シロイ）

池田・馬路でメクサリバナ、漆川以下の地域ではシロイである。メクサリバナは逢坂（1950）に見られるだけであり、尚学図書（1989）にも徳島県三好

郡と出ているだけである。メクサリバナは徳島県美馬・三好地方（上郡）に固有の語形と思われる。また、類語形にメクサレバナというのがあるが、これは金沢（1976）と上柿（2001）に見つかった。愛媛県周桑郡の資料にも記録されている。

一方シロイは県内資料では祖谷地方の語とされている。尚学図書（1989）によれば高知県香美郡の資料にも出ているらしい。

今回の聞き取りでは確実な回答は得られなかった。

11) 椿の実

ツバキモモが出合・河内・西宇で回答されているが、県内資料にも、また小学館辞典編集部（2000～2002）にも「椿の実」としては出ていない。しかし、「桃の一種」としての「つばきもも」の用例に引かれた『名語記』^{みようこ}（1275年成立の語源辞書）に「つはきの実の様なれは」という記述があり、これが椿の実に転用された経緯をうかがい知ることができる。川島他（1978）の記録は貴重と言えよう。

他に川口・河内でツバキボーズ、大野でツバキボーサンが記録されているが、これも他の資料に見あたらず、また今回の調査でも確認できなかった。

カタシが上名・下名・櫟生にあるが、森本（1950）に「椿」として祖谷地方の語とあるほかは県内資料には見られない。尚学図書（1989）によれば金沢（1960）にカタシがあるととなっているが、金沢（1976）にはなく、カタザクラが「椿、椿の実（祖谷・海部）」として出ている。なお、金沢（1976）には、「椿の実」を意味する語にカッタシ、カッタシノミ（三名）、ツバキゴマ（三名）が挙がっており、海南町史編さん委員会（1995）にカタイシが、井上（1937）にツバノミが報告されている。

12) フトイ（大きい）

出合以南、すなわちほとんど山分北に属する地域で「大きい」の意味でフトイと言うとなっている。

県内の方言集では、森本（1950）が祖谷の言葉とし、金沢（1976）は「山分語の代表的なもの」としているが、その他、田村（1968）、俵（1990）以外には見つからなかった。

尚学図書（1989）を見ると九州地方の他、山形県東田川郡、新潟県佐渡、石川県輪島、長野県佐久、広島県、山口県都濃郡、愛媛県、高知県といった広

がりを持っている。

今回の調査、大野での聞き取りでは日常的に使われるという印象は受けなかった。

13) キブイ・サガシイ・キューイ (けわしい)

大野・河内を除いてキブイが挙がっている。またキューイが川口・大野に、サガシイが大野・河内・西宇・上名・下名・櫛生で回答されている。

「険しい。傾斜が急だ」の意味のキブイは吉野川流域各地に分布する語であるが、同様の意味で使われてきたのは、香川県と愛媛県だけのようである。

サガシイは、金沢 (1976) に「古語」と記されているが、東祖谷、一字、半田、貞光、木屋平、神山の資料に出てくる、山分に残ってきた語のようである。尚学図書 (1989) には、千葉、神奈川、山梨、岐阜、静岡、滋賀各県の一部の他、愛媛県、高知県、長崎県対馬で使われたことが示されている。

キューイについては、川島他 (1991) と同 (1996) に出ているだけであり、他の資料に見あたらない。珍しい阿波弁ということになるのか。

14) ミジョイ (短い)

川口以南の山分北に属する地域でミジョイが挙がっている。今回、大野で確認できた。アクセントは低高低 (○●○) である。

県内方言資料では、森本 (1950)、金沢 (1976)、田村 (1968)、俵 (1990)、井上 (1937) に見られるだけであり、尚学図書 (1989) によれば、県外では高知県香美郡にあるだけのようである。

15) トドシイ (早い)

ミジョイ同様に山分北の地域で回答されている。今回の調査では確認できなかった。もう失われたのかもしれないし、トドシューを使うかを聞けば回答が得られたのかもしれない。

県内資料では、金沢 (1976) に「【形】①朝早い ②久しぶりである (祖谷)」と出ているだけである。しかし、トドシューであれば、「朝早く」の意味で森本 (1950) が祖谷の言葉として載せており、また那賀川流域の町村誌・史に収録されている。

尚学図書 (1989) では、金沢市や鳥取県が挙がっているだけである。

16) イソシイ (よく働く)

池田・馬路・漆川・出合・川口では使うという回

答になっている。一方、大野以南については記載が無い。

県内資料では、森本 (1950) に祖谷の言葉として出ている他、三名、東祖谷、池田、半田に見つかったただけであった。しかし、金沢 (1961) には県下全域で使われる旨が示されている。

県外は和歌山県日高郡、香川県三豊郡、愛媛県宇和島市、高知市の方言資料に報告があるらしい。

17) メゲル・ツブレル (壊れる)

池田・馬路・漆川・出合 (上郡中分) ではメゲル、川口・大野・河内・西宇・上名・下名・櫛生 (山分北) と出合でツブレル (●●○○) になっている。

メゲルはほぼ県下全域の方言資料に見られる語であり、山田他 (2012) (新明解) に「東京から中国・四国までの方言」と記されるような語である。小学館辞典編集部 (2000～2002) によれば、東は新潟から中国・四国を経て、九州の長崎までの資料が示されている。山田他 (2012) の注記は、この語が、おそらく近畿地方から東海・中部地方を飛び越して東京に広がったことを意味するのかもしれない。

今回の調査で、メゲルについてうかがった話者のすべてが使用すると回答している。例えば「自転車ノ鍵ガメゲタ」。

一方ツブレルの方は、増田 (1989) に「破産する」意で出てくるだけである。この語は方言と意識されてこなかったのであろう。

18) ヨチメル・ヨツメル (整理する)

馬路でヨズメル、漆川・出合 (上郡中分) でヨチメル、川口以南の山分北の地域でヨツメルになっている。

ヨズメルは県内資料に見あらず、尚学図書 (1989) には神奈川県と和歌山県にヨジメルがあり、これにつながるだろうと考えられる。

ヨチメルは、森本 (1950)、金沢 (1976) に祖谷の言葉として出ている他、田村 (1968) と木屋平の古い資料 (新居熊太メモ) に見つかった。尚学図書 (1989) には、和歌山県東牟婁郡、徳島県美馬郡、高知県にあるとされている。しかし、美馬郡の根拠とされた森本 (1950) の記述とは矛盾している。

ヨツメルは三木 (1971)、木屋平村史編集委員会 (1996) にだけ見つかる。なお金沢 (1976) では空見

出しになっていて、地域は示されていない。県外では和歌山県東牟婁郡と長崎県対馬で使われたようだ。

ヨツメルは、大野の調査で確認できた語のひとつである。

19) タグル・タゴル (咳をする)

タグルは上郡に属する池田・馬路・漆川・川合で、タゴルは、山分北の川口・大野・河内・西宇・上名・下名・櫛生で言うとなっている。

県内方言資料を見ても、タゴルは森本 (1950) が祖谷の言葉とし、金沢 (1976) には「東祖谷・佐那河内・山城・三名」とする。他には俵 (1990) に出てくるだけで、ほぼ山分北の言葉と言って差し支えないだろう。タグルの方は県下広く分布していると言えそうである。

県外の場合、タグルが和歌山、兵庫県から鳥取県を除く中国地方、香川県、愛媛県、福岡県、大分県に分布し、タゴルは、和歌山県、兵庫県、愛媛県、高知県、大分県に分布している (尚学図書 (1989) による)。

大野で確認できたタゴルのアクセントは○●○である。

20) ツダル・テダル・ツレコル (連れ立つ)

「連れ立って」をどう言うかを調べた結果、ツダッテ (上郡)、テダッテ (漆川)、ツレコッテ (山分北) となっている。

ツダッテ・ツダルは金沢 (1961) でも上郡の語となっているが、他の資料は、大正期徳島市、羽ノ浦、鷺敷、上那賀、日和佐であり上郡の方言集には見られない。テダル・テダッテの方は、吉野川流域から県南地方にかけて広く分布していることが方言集からも分かる。ツレコル・ツレコッテは金沢 (1976) に「祖谷」と記されている他、池田町誌編集委員会 (1962)、俵 (1990)、木屋平 (新居熊太メモ) にあるだけである。尚学図書 (1989) にも収録されていない。

今回の調査でもツレコッテは使わずツレダッテと言うという回答が得られている。

6. 語彙Ⅱ

ここでは筆者らが進めてきた吉野川流域言語調査での調査項目に入っているものを取り上げる。

1) 墓蛙 (ゴート)

図5を見ると、県下にもっとも多く分布しているのはオンビキ系である。この語は三好市域にも分布しているが、地図上でオンビキ系より多いのはゴート系になっている。

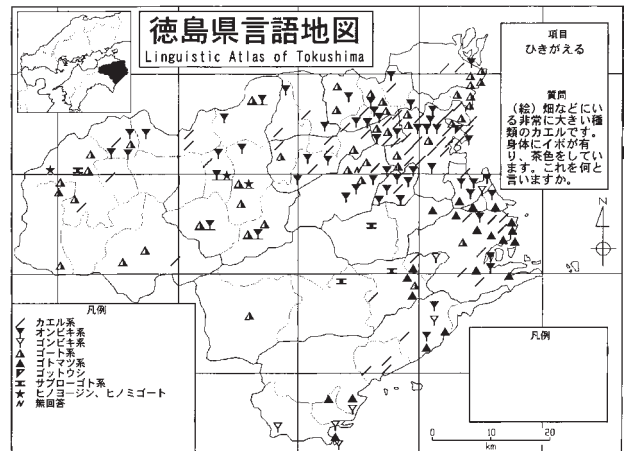


図5 「ひきがえる」 仙波他 (2002)

三好市域の方言集を見渡すと、墓蛙に対して、オンビキは、俵 (1990)、西井 (1982)、井川町史編集委員会 (2006) に、ゴートは俵 (1990)、池田町誌編集委員会 (1962)、西井 (1982)、井川町史編集委員会 (2006) に出ていて、両者はほぼ同じ範囲に分布してきたと思われる。俵 (1990) にゴートが見られるが、これは、小野 (1847) に記録されている古くからの語である。他にゴート系に含めてよい語として、俵 (1990)、山西 (1989) にカサゴート、西井 (1982)、井川町史編集委員会 (2006)、金沢 (1961) (佐馬地) でヒノミゴートがあるが、カサゴートもゴート同様に古くから存在が確認されている語である。また、金沢 (1961) によると、三名にカシンビキが、祖谷にキャシンビキがあったようである。尚学図書 (1989) によると、徳島県美馬郡に雨蛙の意のギャシンビキがあったらしいが、確認できていない。

国立国語研究所 (1972) によると、三好市域にはガマ、ゴート、ヒノミゴートが見られる。県下全体を見渡すと、ゴト/ゴートを語構成要素に含む語としては、ゴト、ゴトマツ、マツゴト、ヒノミゴト、カサゴト、オンバゴト、サブローゴト、ヒキゴト、オトビキが記録されている。

なお、ゴート系に対してゴータ系は、国立国語研究所 (1972) には出てこないが、方言集を見ると、

半田、脇町、北島、松茂に分布し三好市域と対照的になっている。

今回の調査からは、ヒノミゴート、カサゴートという言い方も聞かれた。図5をみても、池田はゴート系を使用していることがわかり、今もなお使用していることが伺える。

2) ホッペタ・ホーベタ（類）

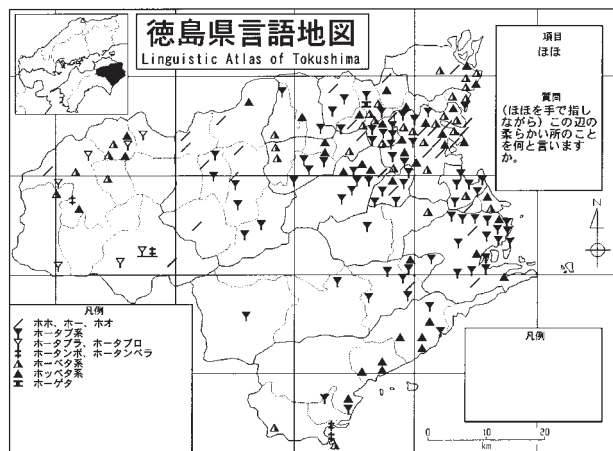


図6 「ほほ」 仙波他 (2002)

上の図6によると、徳島県内ではホータブ系（黒いワイングラスの記号）がいちばん多く70地点、次いでホッペタ系（▲）が37地点、そしてホーベタ系（半分白い三角）が30地点となっている。また国立国語研究所（1968）では、吉野川流域がホーの地域になっている。

小学館辞典編集部（2000～2002）を見ると、ホッペタ・ホーベタともに、18世紀から使用例が確認できるが、小学館辞典編集部（1991）は、これらが江戸中心に勢力をもって広がった語形と推測している。

なお、三好市域では、ホーベタが多く、次いでホータブラ、ホータプロ、ホータンボまたはホータンベラが認められる。

方言集には、俵（1990）にホホカンパチ、井川町史編集委員会（2006）にホータプロが見つかる。

3) マケル（あふれる）

水などがこぼれ、あふれることをマケルというが、共通語には他動詞のマク（撒く）はあるが自動詞のマケルはない。自動詞のマケルを使用する地域は尚学図書（1989）によると、兵庫県淡路島、岡山県岡山市・児島郡、四国四県になっている。

今回の調査で、話者からは、「ブチマケル」「マケ

ダス」という言い方も聞くことができた。ブチマケルとは、派手にこぼれるの意であり共通語のブチマケル（他動詞）とは意味が異なる。マケダスは、あふれだすの意。

なお、俵（1990）によれば「あふれる」ことを東祖谷ではアバケルとも言うようだ。

4) クダク（両替する）

大きい貨幣を小さい単位の貨幣に両替することをクダクと言う。話者ほとんどがクダクと使用し、コワスという言い方も使用する。尚学図書（1989）には、青森県津軽と徳島県に資料がそれぞれ1点挙げられているだけである。今回の調査では、男性も女性も使用するという回答を得た。しかし、三好市域の方言集には採られていない。

なお歴史的には、17世紀の浮世草子『新可笑記』（井原西鶴）に「路銀のうち十両〈略〉是をくだきてつかふべき才覚なし」という例があり、この用法が青森県と徳島県に残っているものであろう。共通語では、クダクに代わりクズスが使われるようになった。

5) イラウ（触る）

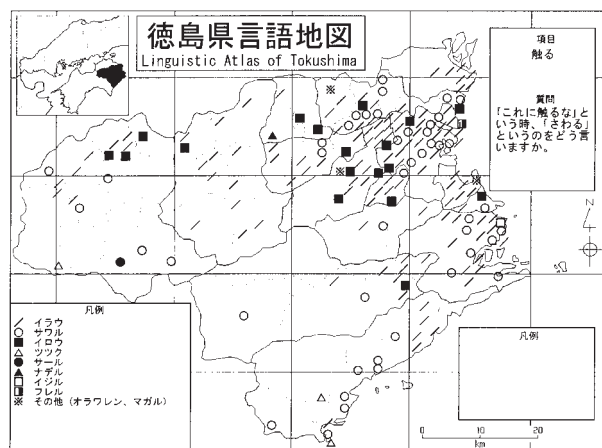


図7 「触る」 仙波他 (2002)

触ることをイラウと言う。県内の全域において使われる語であるが、これを見出しとする県内方言資料はさほど多くない。三好市の範囲では、池田町誌編集委員会（1962）と井川町史編集委員会（2006）にある。

小学館辞典編集部（2000～2002）には、虎寛本狂言・仏師（室町末～近世初）「其うへいらふて見ましたればまだ人肌で御座った」が初出例としてあり、『物類称呼』（1775）には、「なぶる 手にてなれふる

るなり 関西にて、いらふと云」とみられ、江戸中期から方言とみられていたことが分かる。

6) マガル (邪魔になる)

徳島方言で、邪魔になる・障害になることをマガルと言う。県下全域で使用される語である。マギルともマゲルとも言うところがある。マギルは三好市域では、俵 (1990) に記録されている。マゲルは使われないようだ。県外では、兵庫県淡路島、香川県、愛媛県で使われる。

7) チミキル (抓る)

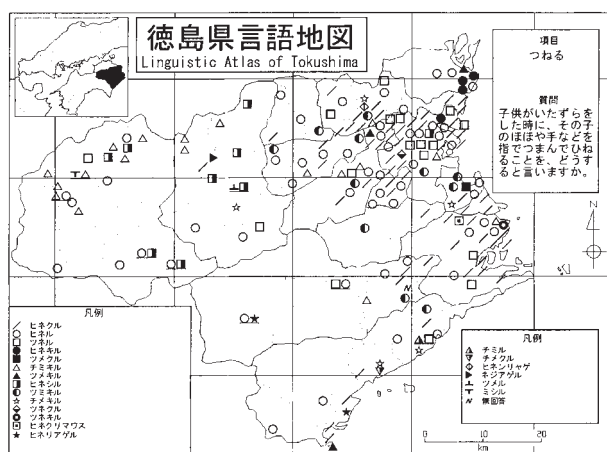


図8 「つねる」 仙波他 (2002)

上の図8には「子供がいたずらをした時に、その子のほほや手などを指でつまんでひねることを、どうすると言いますか」という質問に対する回答が示されている。ここには、チミキル、チミル、チメキル、チメクル、ツネキル、ツネクル、ツネル、ツミキル、ツメキル、ツメクル、ツメル、ネジアゲル、ヒネキル、ヒネクリマウス、ヒネクル、ヒネシル、ヒネリアゲル、ヒネル、ヒネンリヤゲル、ミシルと20語を認めることができる。

この図で三好市に多い回答にチミキルがある。三好市域の方言集でチミキルがあるのは西井 (1982)、井川町史編集委員会 (2006) だけである。しかもその意味は「つまみ切る」であって「つねる」ではない。これは地図の調査結果と矛盾があるように見えるが、要するに使用場面によって「切る」方に重点があるかどうかの違いに過ぎないのであろう。したがって、チミキルの語釈には「つねる」を付け加えればよいということになる。

三好市域の方言集に採録されているもう一つはヒ

ネシル (俵 (1990)) である。図8では三好町に2地点があるが、東祖谷以外の方言集には出てこない。ヒネシルは、方言集の編纂に関わった人に方言と意識されなかったのであろうか。

図8でもう1語回答が多いのがヒネルであるが、これを収める方言資料は、橋本 (1939)、金沢 (1976) の他3地域に過ぎない。もっともヒネルは共通語と言えなくもない。

県内方言資料で「抓る」の意味が示されているのは、チミキル (半田、貞光、脇町、阿波)、ツミキル (徳島、羽ノ浦、上勝)、ヒネル (脇町、徳島、相生)、ヒネクル (半田、徳島、羽ノ浦、那賀川流域、由岐、日和佐、牟岐)、ヒネシル (東祖谷、貞光、阿波、徳島)、チメクル (牟岐) などである。

8) ホレ・ドボレ等 (馬鹿)

付：ホーケニスル (馬鹿にする)

馬鹿を表す言葉を調べるのは、それが単純に面白いからではない。松本 (1993) が方言成立に関する柳田国男の仮説「方言圏論」を、馬鹿を表す語の分布を明らかにすることによって証明したと受け止められたからである。馬鹿を表す言葉を整理してみると、それが京都を中心とする同心円状に分布することが分かったというのである。

一方、細かく調べてみると、馬鹿を表す言葉は実に多彩である。徳島県内の方言資料に確認できた語数は156語にのぼる。図9において「/」で示されている語は「アホ・バカ系」となっているのだが、これは、アホの他に、アホー、ドアホも含まれることを意味している。

上郡に特徴的なのが、ホレ系が広く分布していることである。この類は方言集を見ても上郡にしか見られない。ホレ、ドボレ、クソボレ、ドクソボレがホレ系に含まれ、池田町誌編集委員会 (1962) にはドツボレの形が備考欄に示されており、最近の四国放送ラジオへのメールでもこれがあった。これらの語形は日本全国を見渡しても、他には見られないようである。歴史を溯ると、15世紀後半成立と考えられている『文明本節用集』に「毫者 ホレモノ」があり、少なくとも17世紀までは京都で使われていた証拠がある。徳島県のホレ系はこの子孫であろう。なお沖縄の方言にフリムンがあるが、これも「惚れ

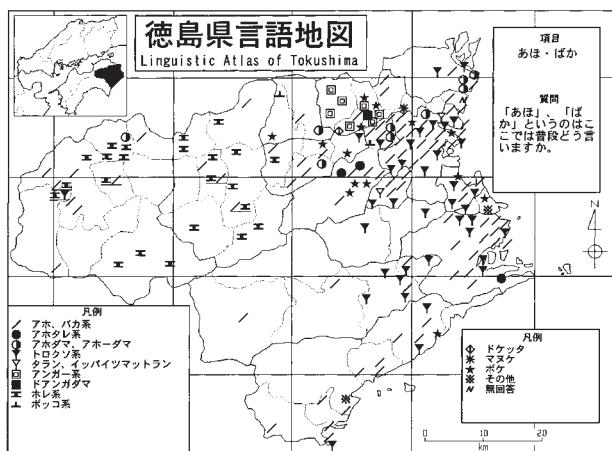


図9 「あほ・ばか」 仙波他 (2002)

者」のことである。

県内の分布で興味深いことのひとつは、ホレが上郡から離れた木沢の資料にも見られることである。おそらく剣山山麓伝いに伝わったものであろう。

なお金沢 (1976) には山城の言葉としてアンダーサレが見られる。これは板野郡に分布しているアンダー系の言葉が山分北にも伝わっていたことを意味するのであろう。

次に「ホーケニスル」について付言しておく。この表現は、「(人)を馬鹿にする、軽蔑する、ないがしろにする、のけ者にする」の意味で使われ、県下全域と香川県の一部に分布し、ホーケ単独で使われる場合 (ホーケジャ=馬鹿にされた) にも、その意味は「馬鹿にする」であり、池田町誌編集委員会 (1962) に出ている「ほうけにあう」という使い方の場合も「馬鹿扱いされる」の意であり、ホーケは「馬鹿」そのものではないのが一般である。しかし、俵 (1990) には「ホーケ 馬鹿」とある。

7. 語彙Ⅲ

この項では、今回の調査期間とは別に採集できた三好市の俚言について述べる。以下の3語はいずれも四国放送ラジオ「土曜ワイド徳島」に寄せられた情報がきっかけで確認できたものである。

1) とそんこ

おっちょこちよい、あわてもの。山城町で今も使われているが、若い人は使わないようだという言葉。徳島県では報告されていない語である。トソンコは香川県の文献にあるが「手荒いこと」と意味が

ことなる。また、「軽率なさま」の意味でトソンドが高知県、大分県に、トソドが兵庫県淡路島に、岡山県にはトソソグがある。

2) ヘリヤい・ヘリヤこい (へらこい)

これも上記と同じ男性からの情報である。ヘリヤコイはヘラコイと同じであり、この形は阿南でも使うという電話があった。ヘリヤイの方は、「(異性に対して) まめな」の意味でも使うという。この意味のヘラコイは愛媛、香川に分布する。

3) なぐる【薙】

なぎ倒すように草を刈ること。また、草を抜くこと。小松島の男性から「草刈作業中の人が一休みの後『さあ、なぐってこうか』と言った。草を刈るという意味だ」という情報がもたらされた。このナグルに草を刈るという意味があることを記した辞書等はない。しかし、藍住町と山城町の方から「なぐり鎌」があることを教えられ、三好市での聞き取りで、ナグルにこの意味があることを確認できた。また、西祖谷山村の方から「手で草を引くこと」も言うて教えていただいた。山西 (1989) の「農作業に関する方言」の項には「なぐる なぎ倒す」と書かれている。草を刈ると明示されていないが、「(草などを) なぎ倒す」と解釈しても問題は無いだろう。

8. おわりに

今回、山城町を中心とする三好市域の40年前の調査報告からの変化を主に調査した。その結果、文法面では、日本語史上の大きな関心であり、中央 (上方) では近世に進展した変化が、三好市域でもこの数十年の間に完了したであろうことが分かった。また、語彙の面では動植物名で忘れられてしまった語が多く、形容詞や動詞ではまだ保たれているのではないかと推測できる結果が得られた。

今回分かったことは、高齢者層に偏ったものであり、一部の地域に限定されることではあるが、より広い地域での変化の状況を推測する手がかりとなるであろう。

謝辞

今回の調査では、多くの方からご教示をいただく

ことができた。以下に、お名前を記し（敬称略，順不同），ここにお名前を挙げるのでできなかった方々も含めて感謝申し上げます。

山城町大野

行重好子，大久保米子，下大寺秀夫，古奥茂明

池田町箸蔵

佐々木厚子，獅子堂義治，竹内伸重，福田敬二，
柳倉ミエコ

【参考文献】

（1）

上野和昭・仙波光明・森重幸（1991）：「徳島県三好郡山城谷アクトセントの動向―二拍名詞を中心に―」『徳島大学国語国文学』第4号

国立国語研究所（1968）：『日本言語地図』第3集 国立国語研究所

国立国語研究所（1972）：『日本言語地図』第5集 国立国語研究所

川島信夫・森重幸・金沢浩生（1978）：「山城町の方言」『総合学術調査報告 山城町 郷土研究発表会紀要 第24号』阿波学会・徳島県立図書館

小野蘭山（1847）：『重訂本草綱目啓蒙』

川島信夫・森重幸・金沢浩生（1991）「松茂町の方言」『総合学術調査報告 松茂町 阿波学会紀要 第37号』阿波学会・徳島県立図書館

川島信夫・金沢浩生（1996）「北島町の方言」『総合学術調査報告 北島町 阿波学会紀要 第42号』阿波学会・徳島県立図書館

国立国語研究所編（1967）：『日本言語地図』大蔵省印刷局

小学館辞典編集部編（1991）：『方言の読本』小学館

小学館辞典編集部編（2000～2002）：『日本国語大辞典 第二版』小学館

小学館辞典編集部編（2004）：『標準語引き 日本方言辞典』小学館（佐藤亮一監修）

尚学図書編（1989）：『日本方言大辞典』小学館

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）：『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室

仙波光明（2008）：「美馬市木屋平村の方言」『総合学術調査報告 美馬市木屋平村 阿波学会紀要 第54号』阿波学会・徳島県立図書館

仙波光明・村田真実・峪口有香子（2013）：「旧三加茂町の方言」『総合学術調査報告 東みよし町「旧三加茂町」 阿波学会紀要 第59号』阿波学会・徳島県立図書館

平山輝男・上野和昭（1997）：『徳島県のことば 日本のことば シリーズ36』明治書院

松本修（1993）：『全国アホ・バカ分布考―はるかなる言葉の旅路―』太田出版 のちに新潮文庫（1996）

森重幸（1962）：「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料

森重幸（1962）：『徳島県のカマキリの方言』私家版

森重幸（1982）：「徳島県の方言」『講座方言学11 中国四国地方の方言』国書刊行会

山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編（2012）：『新明解国語辞典 第七版』三省堂

（2）

徳島県下の方言の所在は，以下の資料を検索の対象とした。

相生町誌編集委員会編（1973）：『相生町誌』相生町

藍住町史編集委員会編（1965）：『藍住町史』藍住町

阿波町史編集委員会編（1979）：『阿波町史』阿波町

井川町史編集委員会編（2006）：『井川町史』井川町役場

池田町誌編集委員会編（1962）：『池田町誌』池田町

井筒茂編（1931）：『稿本 宝田村誌略 卷九』井筒茂

井上一男（1937）：「木頭地方々言語集」『郷土阿波 14号（通巻14）』阿波郷土会

逢坂左馬之助（1950）：『半田町史』半田町史出版委員会

鬼籠野村誌編集委員会編（1995）：『鬼籠野村誌』鬼籠野村誌編集委員会

海南町史編さん委員会編（1995）：『海南町史下巻』徳島県海部郡海南町

金沢治（1960）：『阿波言葉の辞典』徳島県教育会

金沢治（1961）：『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館

金沢治（1976）：『改訂阿波言葉の辞典』小山助学館

金沢浩生・仙波光明・岩佐美紀・石田祐子（2001）：「相生町の方言」『総合学術調査報告 相生町 阿波学会紀要 第47号』阿波学会・徳島県立図書館

上柿源内（2001）：『阿波貞光町の息吹』上柿源内

上那賀町誌編集委員会編（1982）：『上那賀町誌』上那賀町

上分上山村誌編集委員会編（1978）：『上分上山村誌』上分上山村誌編集委員会

神山町成人大学編集部編（1990）：『神山の方言と言い伝え』神山町教育委員会

鴨島町（1940頃か）：『鴨島読本』鴨島町

川島信夫・森重幸（1992）：「半田町の方言」『総合学術調査報告 半田町 阿波学会紀要 第38号』阿波学会・徳島県立図書館

木沢村誌編集委員会編（1976）：『木沢村誌』木沢村誌編集委員会

國見慶英（1999）：『脇町の方言と語詞』國見慶英

木屋平村史編集委員会編（1996）『木屋平村史』木屋平村

島田泉山（1901頃）：『阿波希ん奴』（稿本）（仙波光明（1995）「徳島大学方言研究会報告4 資料紹介『阿波希ん奴』」『徳島大学国語国文学 第8号』徳島大学国語国文学会）

神領村誌編集委員会編（1960）：『神領村誌』神領村誌編集委員会

谷典博（2003）：『牟岐のことば 地名 道』牟岐町教育委員会

田村正編（1968）：『三名村誌』山城町

俵裕（1990）：「祖谷の方言」『ひがしいやの民俗』東祖谷山村教育委員会

土壁重信（1976）：『消え去りゆく大里言葉』土壁重信

西井治夫（1982）：『井川町誌』井川町役場

西方村誌編集委員会編（1983）：『西方村誌』西方村誌編集委員会

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部（2001）：『日本国語大辞典 第二版』小学館

橋本亀一（1939）：『阿波の國言葉』国書刊行会

羽ノ浦町誌編集委員会編（1995）：「民俗編」『羽ノ浦町誌』羽ノ浦町

半田町方言保存会編著（2005）：『阿波半田の方言』半田町方言保存会

ふるさと佐那河内編集委員会編（1992）：『ふるさと佐那河内』佐那河内村

増田明（1989）：『鳴門の方言』増田明

森本安市（1950）：『阿波方言集 阿波民俗叢書・第三輯』森住博榮堂書店

森本安市（1979）：『たのしい阿波の方言』（阿波文庫7）南海ブックス

西内滝三郎（1920）：『一字村誌』一字村

三木近太郎（1954）：『古宮村誌』（稿本）古宮村郷土研究会

三木寛人（1971）：『木屋平村史』麻植郡木屋平村役場

山西治重（1989）：「山城の方言」『ふるさとの故事 総集編』山城町社会福祉協議会・山城町老人クラブ連合会

鶯敷町史編集委員会編（1981）：『鶯敷町史』鶯敷町

Dialect of Miyoshi City, Tokushima, Japan

SENBA Mitsuaki*, SAKOGUCHI Yukako

* 109-14 Okuno Wada, Aizumi-cho, Itano-gun, Tokushima 771-1202, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No. 62 (2019), pp. 113 – 124.